

Microsoft Build 2026を 知財業務の視点で読む

「AIに聞く」時代から、知財プロセスを
「エージェントに任せる」時代への設計図

Manus AI

Build 2026が示唆する知財部門のパラダイムシフト

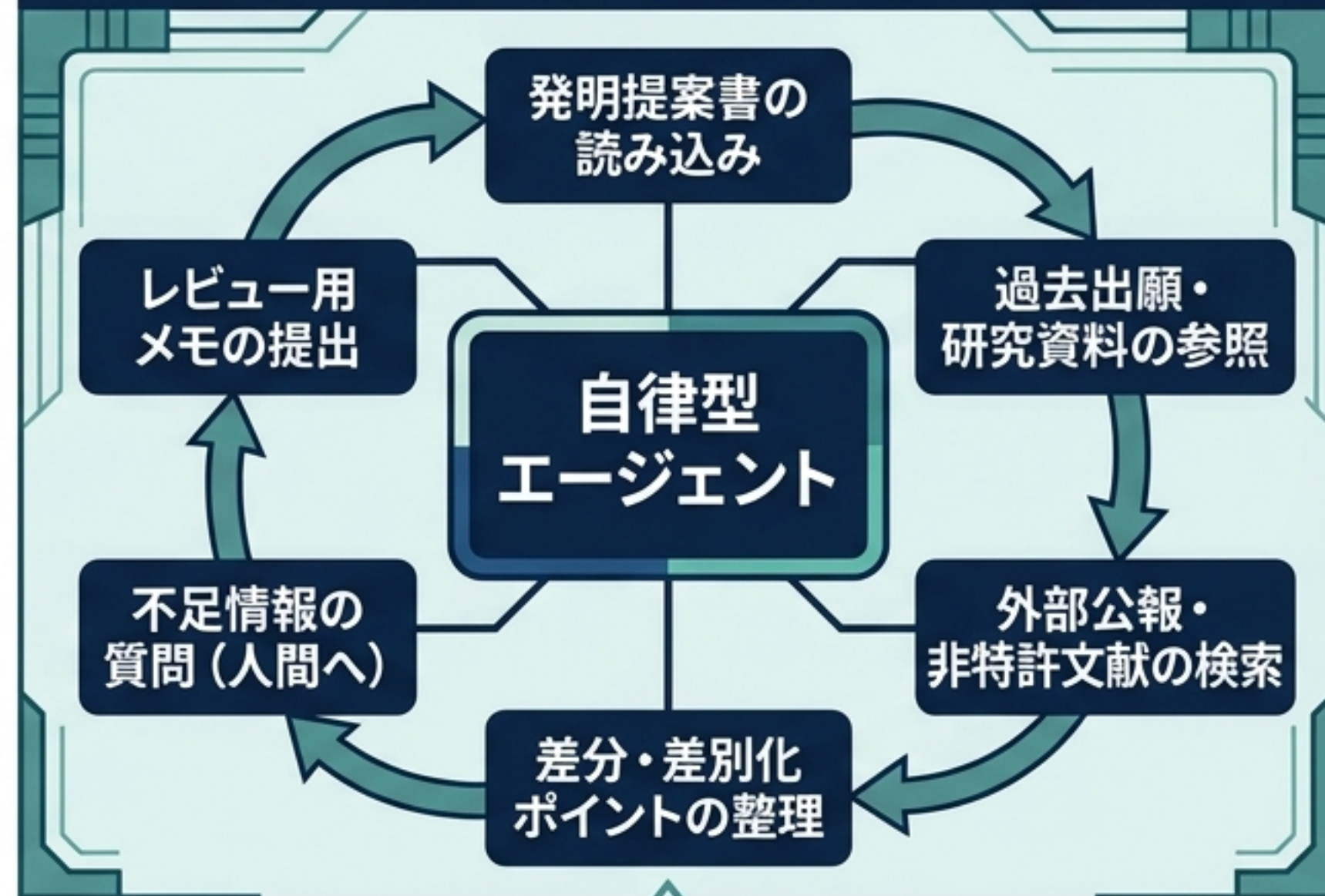


生成AIの利用は「質問応答」から「自律的タスク遂行」へ

「単発の依頼と応答」

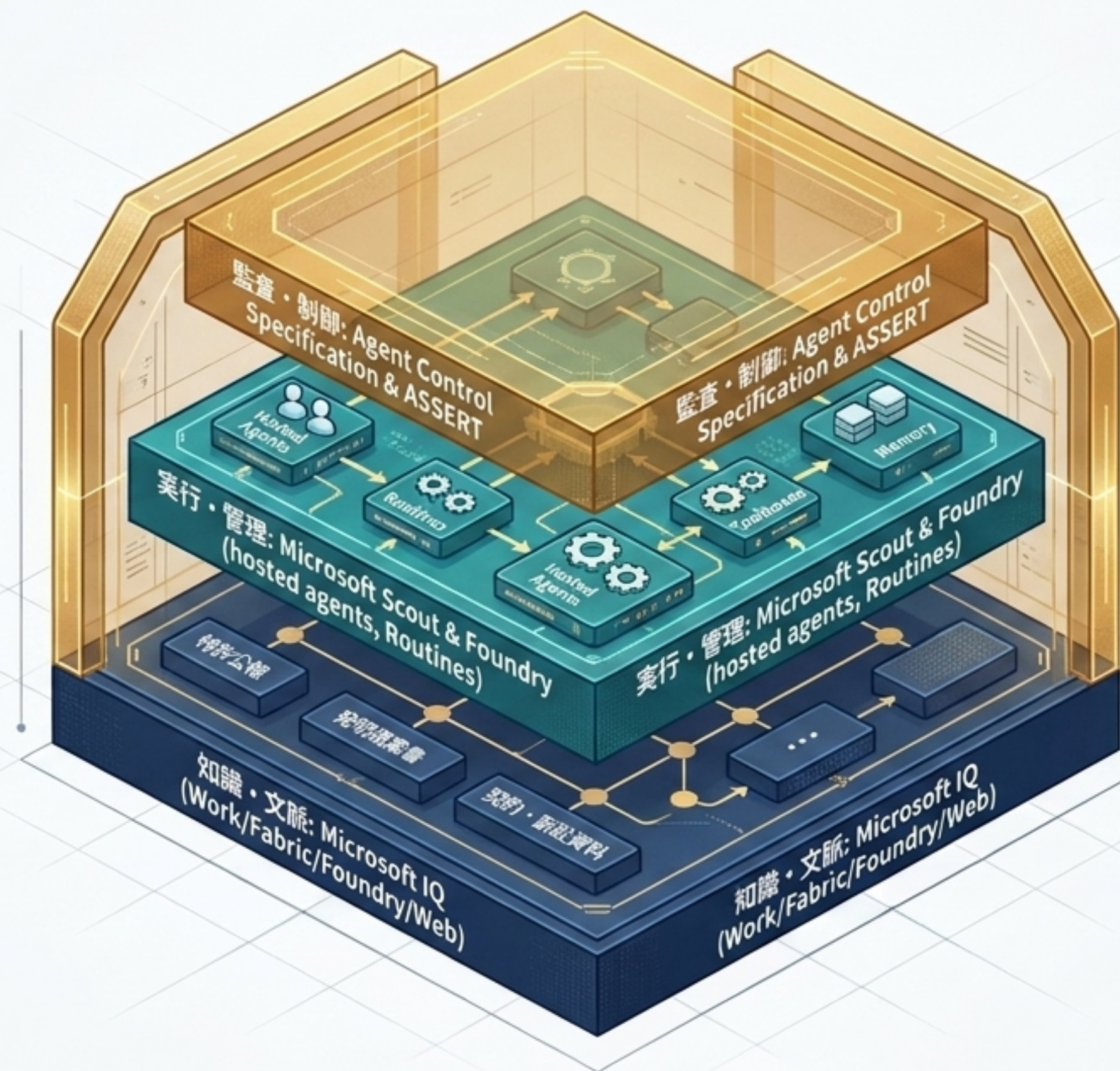


「自律的なタスク遂行と承認ループ」



「この発明について先行技術を調べて」という単発依頼ではなく、エージェントが複数情報源を検索し、進捗を記録し、最終的にレビュー用メモを提出する業務設計が現実味を帯びる。

知財エージェント基盤のアーキテクチャ設計図



監査・制御：行動を監査・制御し、未公開発明の外部送信防止や人間を承認を必須化する強固な枠組み。

実行・管理：Teams/SharePoint等で常時稼働し（Scout）、記憶とスケジュール実行を管理する（Foundry）。

知識・文脈：社内外の特許・社内文書・文脈をエージェントに与える統合基盤。

ワークフロー・シミュレーション：先行技術調査の自動化プロセス



Step 1: 検知

開発部門からの発明提案書の提出をScoutが検知。



Step 2: 文脈収集

Foundry IQが社内研究ノートや過去出願(Entra ID権限内)を自動収集。



Step 3: 外部検索

外部の特許公報DBを検索・差分抽出(Web IQ連動)。



Step 4: 人間承認 [Human Gate]

検索結果と分析メモを知財担当者にTeamsで提示・レビュー要求。



Step 5: 起案実行

OA対応案やクレーム差別化案のドラフト作成(GitHub Copilot/Agent Framework)。

単なるツールの呼び出しではなく、プロセス全体を監視・記憶し、必要なタイミングのみ人間の介入 (Human-in-the-loop) を要求する。

知財実務における役割分担：AIの作業領域と人間の高度判断

知財業務領域	エージェント化で変わる点	人間が残すべき判断
発明発掘	研究会議、実験記録、仕様書から出願候補を継続抽出する	発明の本質把握、事業価値、出願要否、発明者との合意形成
先行技術調査	検索式作成、文献抽出、要約、差分整理を自動化する	調査範囲の妥当性、引用文献の法的評価、請求項設計への反映
中間処理	OA、引用文献、過去応答、審査官傾向を横断し、応答案を準備する	補正・反論方針、禁反言リスク、権利範囲の事業適合性
FTO・侵害予防	製品仕様と競合特許のクレーム対応表を初期生成する	文言侵害・均等論・無効可能性の法的評価
契約・ライセンス	NDA、共同研究、ライセンス条項を社内基準と照合する	交渉戦略、リスク許容度、相手方との商業条件調整
ポートフォリオ管理	出願群、年金、製品、売上、競合動向を統合分析する	維持・放棄、海外展開、権利行使、標準化戦略

知財領域における最大の要件：「統制 (ガバナンス)」の設計

知財領域ではエージェント化の効果と同じくらい、**統制設計**が重要になる。



機密保護 (Data Protection)

未公開発明・共同研究先情報の外部送信禁止・権限逸脱防止。



介入設計 (Human-in-the-Loop)

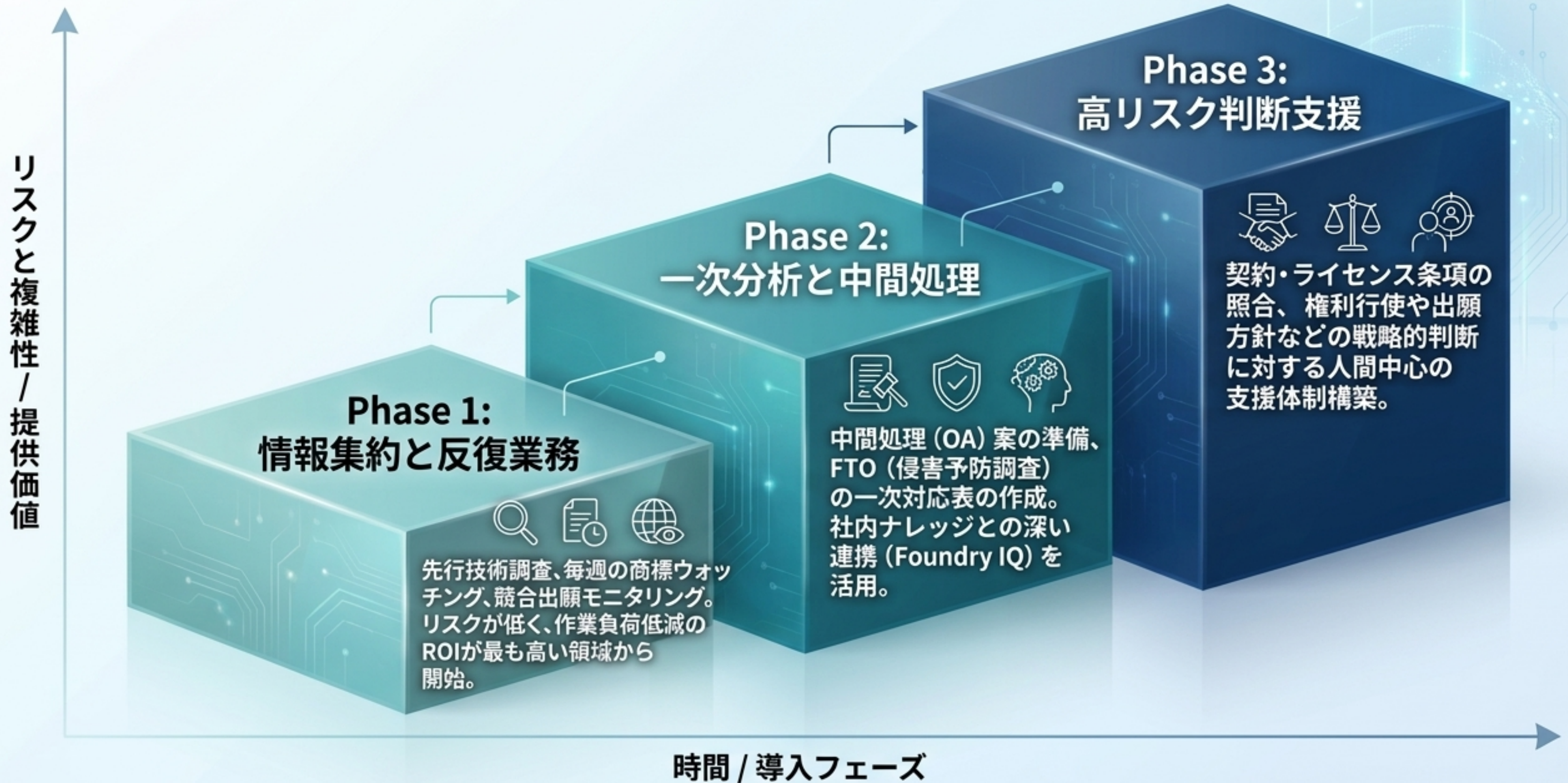
出願提出前や外部への回答における「人間承認 (Human Approval)」の必須化。



追跡可能性 (Traceability)

生成物に対する根拠・引用文献の提示要求と、エージェント行動の完全なログ保存。

知財エージェント導入の戦略的ロードマップ



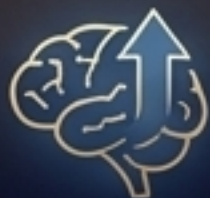
結論：単体ツールの選定から、統合プロセスの設計へ



Build 2026が発したメッセージは、「AIを使うかどうか」ではなく、
どの業務を、どの統制のもとで、どこまでエージェント化するかを
設計する時代の幕開けである。



- 知財ナレッジ基盤、権限設計、承認フロー、監査ログを一体で設計することが今後の競争力となる。



- 知財担当者の価値は決して低下しない。



- 調査・整理の作業負荷から解放されることで、発明の本質把握、権利化戦略、紛争予防、そして事業判断との接続という、より高度な知的生産へシフトする。